文教福祉常任委員会

視察研修報告書

報告書提出日：2023年3月13日(月)
作成者氏名　：田村隆光

研 修 名	（1）福祉買い物リハビリについて（愛知県長久手市議会） （2）不登校特例校の取り組みについて（愛知県長久手市議会） （3）文化創造拠点シリウスについて（愛知県長久手市）
研修日時	2022年11月14日(月)～15日（火）
研修場所	（1）愛知県長久手市議会 （2）愛知県長久手市議会 （3）愛知県長久手市
参加者氏名	（議員）上田忠博・川嶋 恵・田村隆光・梶原美保・西田 聡・伊吹 裕 （当局）木村洋子長寿福祉課課長・西村滋城栗東市議会事務局議事課長

◆愛知県長久手市（11月14日）

・長久手市は、名古屋市東側に位置し、総面積は21.55kmのまちで、人口60,352人。
・家康と秀吉が戦った小牧・長久手の戦いや愛知万博の開催地として知られている。
・平成24年1月に市制を施行して現在の長久手市となった。
・名古屋市や豊田市に隣接する事から子育て世代の流入が多く人口増加が続いています。
・イオンモールやIKEAなどの大規模商業施設が相次いでオープンしている。

◆福祉買い物リハビリテーションについて

＊事業着手経緯

・H30年当時、市内に理学療法士等のリハビリ職がおらず、通所C（リハビリを主体とした専門職によるサービス）が実施可能な事業所がなかった。
・模索中に岐阜県可児市の事案に遭遇、相談、実施。

＊概要

・介護予防と買い物支援を組み合わせた事業として、平成30年7月から開始。公募した2事業者に委託し、それぞれ市内の3つのスーパーマーケットの一画を使って運動を行い、教室の後半では利用者が各自買い物もできる。送迎付きで、普段外出のしづらい方、買い物の荷物を運ぶことが難しい方が利用。

「買い物」という日常生活に欠かせない行為に送迎の支援をすることで、単なる買い物支援だけでなく、身体を動かすことや、参加者同士の交流につながり、介護予防、健康づくりにつながっていくことを目的としている。令和4年7月時点、3箇所で実施。

＊利用の流れ

・送迎は、ワンボックスカー（8人乗り×3台）、コースター（14人乗り）
・体調チェックは、３ヶ月おきに実施
・ウォーミングアップとして、日常生活のあらゆる場面を想定した運動を実施。
・買い物は自由行動であり、会員はセルフレジを積極的に使う。

▲買い物の前に簡単な体操をする高齢者の皆さん

＊費用等

・参加費＝300円／回
・委託料（令和3年度）＝4,950,000円

＊必要となる職員数

・運転手
・運動指導士もしくは理学療法士
・運営補助（ボランティア）
※通常３～４名で対応。職員は市の職員ではなく委託事業者の職員を指している。

▲長久手市の職員さんから説明を受ける委員

＊事業のメリット

・テナント料不要
・送迎車両はデイサービスの空き車両を活用
・支出は、人件費のみ。

＊参加者の現状（2022年9月時点）

・アピタ長久手店＝12人（男性2・女性10）
・平和堂＝10人（男性3・女性7）
・ピアごパワー＝11人（男性1・女性10）

＊成果と課題

・1これまで介護予防事業に参加してこなかった人が活用するようになった。
・高齢者の買い物をサポートすることで、立度合いの維持・改善につながっている。
・多様な生活機能度合いの方が教室を通して交流する機会が増えた。
・加茂 聡のリハビリ参加者の出口のタイミングをどうするかが課題。

◆感想

・買い物リハビリは、介護予防をはじめ認知症予防、地域経済活性化など多くの効果が期待されている事業であり、その先進的な取組を見てみたいと思っていた。
そんな中、当委員会で長久手市の取組状況を学ぶ機会ができたことはありがたかった。
　内容としては、自宅から3か所のスーパーにそれぞれ送迎して健康チェック、体操、そして買い物、交流という流れの中で、高齢者が体を動かすだけではなく、コミュニケーションの場としてこの制度が存在していた。
　また、実際の効果として、自動車運転免許証を自主返納された方を含めて買い物に困っている方への支援策にもつながる事も説明していただき、高齢者の移動手段としての重要な制度だと理解できた。

◆神奈川県大和市（11月14日）

・大和市は、神奈川県のほぼ中央に位置する市。
施行時特例市に指定されている。 人口は約24.1万人。東京都区部への通勤率15.3%、横浜市への通勤率は18.3%。

◆不登校特例校について

＊大和市の不登校の現状

・大和市では年間30日以上欠席している生徒数は、平成22年度183人が、令和元年は238人と増加傾向にある。

＊これまでの取り組み

・不登校の未然防止と早期解決のためにその要因を早期に発見し解決できるよう「不登校生徒支援員」を全中学校に配置。（週４勤・５時間／Day）
・全中学校に、臨床心理士の資格を持つスクールカウンセラー（週１～２）
・学校に登校できなくなった子どもたちのために、大和市青少年相談室には、スクールソーシャルワーカー（３名）や青少年心理カウンセラー（３名）を配置し支援するとともに教育支援教室「まほろば」も整備。

＊不登校特例校分教室設置の趣旨

▲大和市立引地台中学校の分教室「WING」の教室

・不登校の生徒の多くは、何らかの心理的、情緒的あるいは社会的要因や背景により、登校しない、あるいは、したくともできない状況にある。これまで大和市では、学校復帰を視野に入れながら、不登校の生徒一人一人の状況に寄り添う支援体制をとってきたが、そのことを望む生徒がいる一方、これまで通ってきた学校以外の場で、社会的な自立を望む生徒もいる。
そこで市では、不登校の生徒の選択肢が増えるよう、学校への復帰を目標としない「不登校特例校分教室」を引地台中学校に開設した。
令和3年12月議会において補正予算を計上することで、学期の節目で新生活をスタートさせやすい4月にあわせて開校した。

＊内容

・「不登校特例校分教室」に所属する生徒は、在籍していた学校から同教室（引地台中学校）に転籍し、引地台中学校の生徒となる。
・ぶん教室では登校できない日であっても自分で　オンライン学習やカウンセリング等を受けることができる。
・同教室では一人ひとりの状況に合わせ柔軟な学　習計画のもと生徒にとって無理のない学校生活をつくりだし、社会的自立を目指していく。

①開設地
・元教育研究所理科センター
②入室生徒数（定員30人）
・現在＝中１：1人、中２：8人、中３：8人
③授業時間
・原則午前３単位、午後２～３単位（50分／単位）
・9:15登校～9:30スタート（午前午後3時間）
④教室数
・１教室6人程度で１階２室、３階４室の計6室
⑤補正予算額
・43,281万円
・開校：令和4年4月
⑥教職員配置について
・教員は 4 名で一人が総括、学年に 1 名の教員配置であり、県教育委 員会による定数配置。 管理者、養護、保健体育、音楽、美術の教諭は本校と兼務。

▲分教室の中。生徒は自由に活用できる

⑦卒業後の進路について
・学習支援を目指さずに社会的自立を目指している。 サポート高校、通信制高校が中心となると思うが、卒業後どういっ た進路があるのか、進学するためには何が必要なのかを教養課程で 学んでいく。

◆感想

・令和 4 年 4 月の開設間もない「不登校特例校分教室」であり、施設運営の予算についても引地台中学校の予算の中で運営をしていることで厳しい状況の中でも指導者の情熱を感じた。また、中学校という状況下は、高校進学も見据えなければならず学習時間や内容等確保もしなければならないが、その子に合った指導が必要であるとのことであり、行政だけでなく、地域も含めての支援体制も必要であることを感じた。生徒が帰宅した後の夕方からの短時間での視察であったが、現地で分教室の現状も視察させていただき、様々な取組みへの工夫を感じた。

◆大和市文化創造拠点シリウスについて（11月15日）

＊オープン
・2016 年11月3日
＊概要
・芸術文化ホール、図書館、生涯学習センター、屋内こども広場等で構成され る地上6階、地下1階の大型複合施設である。
大和駅東側の再開発事業で官民複合ビル「YAMATO文化森」（地上６階、地下１階建て）内に整備。
延べ床面積は約２万３千平方メートルで、６社による指定管理者が運営している。
土地は30年の借地。
各階にテーマ別の図書空間として、▼1階＝感動が生まれる感性と創造の場、▼2階＝楽しく語り集う市民交流のフロア、▼3階＝思い切り遊んで学ぶ大和こどもの国、▼4階＝くつろぎながら本に親しむ健康都市図書館、▼5階＝調べて学ぶ図書館、▼6階 ＝仲間と集い学ぶ生涯学習センター

▲シリウスの外観

▼感動が生まれる感性と創造の場

▼楽しく語り集う市民交流のフロア

▼思い切り遊んで学ぶ大和こどもの国

▼くつろぎながら本に親しむ健康都市図書館

▼調べて学ぶ図書館

▼仲間と集い学ぶ生涯学習センター

◆感想

・まずは、「圧巻」、「圧倒」という言葉しか思いつかないような羨ましい限りの施設。「賑わいづくり」の施設としては、大成功の施設であり、市長をはじめ職員の情熱と日頃の市民に対する目線の違いを感じる施設であった。
すべてのフロアにテーマがあり、すべてに「市民が居心地の良い居場所」としてどうあるべきかが工夫されている。また、図書館を指定管理にということで一般的には賛否あるが、ここはそれぞれの施設を６社で構成する指定管理者やまとみらいが運営し成功している。指定管理の運営の参考になるのではないか。
いずれにしても、大和市の地理的な優位性もあると思うが、市内外の利用者が訪れ、また全国からの視察も多い施設であることは当然のことだと実感した。